

新刊批評

ペンローズ著『人口理論と

その應用』

—E. F. Penrose, Population Theories
and their Application, with special
reference to Japan, California 1934.—

南 亮 三 郎

著者ペンローズ氏は現在スタンフォード大學の食糧研究所の一員であるが、かつては名古屋高商に教鞭をとつたこともある日本通で、數年前には「日本に於ける食糧供給と原料」(Food Supply and Raw Materials in Japan, Chicago 1930)を著はし、特別の關心を日本

ペンローズ著『人口理論とその應用』

の人口食糧問題に有する人として知られてゐた。こゝに紹介する新著『人口理論とその應用』は一面氏自身の理論體系を整理しようとしたものであるが、「特に日本に關聯して」と標記されてゐる通り、その『應用』的論述は主として日本の問題について爲されてゐるので、全體として日本人口問題の研究書と見なしてもよい。

實のところ私はこの書を「三越」の手を経て本年二月初めに入手してゐる。そしてその當時一讀してみてもいろいろの意味で好著と思つたので、全卷にわたる詳しい批判的考察を行ふ意圖をいだいてゐたが、つひその時機を逸してしまつた形である。今日ではすでに日本の學界にも若干の反響を喚び起してゐる際であるから、あらためてこの紹介は無用であらうかと思ふ。しかし差し當つて日本の人口論壇にはこれといふ日星しい新著も見當らないやうであるから、私自身の當面の興味から、本書の一部分の論述を特に取り出してみることにしよう。

その前に一應、本書の構成を紹介して置かう。本書は三部に大別されてゐる。第一部「人口理論」、第二部

「日本人口問題の若干相」、第三部「人口の配分と自然資源の配分」と題され、通じて十一章、オクタヴオ判三四七頁から成つてゐる。著者はこの原稿を四度び完全に書きかへたと自序してゐるが (Foreword p. xii)、なか／＼苦心の末になつたものゝやうに思はれる。しかし通讀して受ける感じを率直にいへば、本書のより高く評價せらるべき部分はむしろ第二部以下の「應用的論述の部分であつて、讀者はこゝで在來通行の多くの日本人口問題觀と異なつたる著者の識見を見出すに違ひない。何よりも啓蒙的なる識見は、著者が日本の一般的「過剰人口」を否定するに傾き、その存在を日本の農村にのみ見ようとするとところにある。

この部分に比すれば第一部の「理論」的記述は晦澁の憾みがあり、またその内容も決して豊饒とはいひがたい。たゞ構想の上から私の興趣をそゝるのは、著者の論述がマルサスの人口理論より發足してゐることである。第一部の首章は「マルサスの理論」にあてられ、そこから輓近諸學者のいはゆる「オプチマム人口の理論」に進むといふ順序をとつてゐる。従つてマルサスの理論は、著者にとつては、單なる學說發展史上

の一地位を有するのではなくて、自家の理論をそこから發足せしめようとする母胎の役目を演じてゐるものと見ることが出来る。そこで著者の想望しようとする人口理論の根本性格はこのマルサス理論をいかに解し、いかに批判するかといふことによつてほど決せられるのである。以下この點に興味を集中して著者の論述を辿つて見よう。

二

まづ第一段に於て「遞減收穫とマルサスの圖式」と題したる條下で、著者はマルサスに於ける例の三つの命題を掲げ、これら三命題を綜觀して含意されてゐると思はれるマルサスの根本思想——conceptual scheme——は、「現實の員數は、それにいかなる附加が行はれても生存資料へのひとしき若しくはより大なる附加を伴はないが故に、現にあるがまゝである、といふことを意味すると解してよい」と論ずる。これはわかりにくい表現であるが、著者はマルサス説の骨子を、人口が永久にわたつて生存資料の水準一杯に満たしてゐる状態をさすものと解するのである。然らばかゝる

状態は何故に生起しまた永續するか？

それはむろん、人口と食物との増加速度が根本的に異なるといふマルサスの謂ゆる根本命題から出であるのであるが、この根本命題がどうして成立したかといふ點の解釋に至つては、著者はキヤナン及び特にフィールドの所見に従ひ、マルサスが後年に至つて『エンサイクロペディア・ブリタニカ』への寄稿文に於て「土地供給の制限」を重視したといふフィールド説 (Field, Essays on Population, Chicago 1931, p. 14) を引用し、そして曰く、

「これは吾々をして、土地供給の制限がマルサスの理論の土臺であると思はしめる。マルサスは吾々の見たやうに、究極の妨げを「人口と食物とがそれに従つて増加するところの異なる比率」から起る食物の不足に歸せしめた。マルサスが一八二四年に——評者註『エンサイクロペディア』に於て——これらの比率の差異を土地の制限に歸せしめた事實を考へれば、右の章句は次の通り云ひかへることが出来る。曰く、人口に對する究極の妨げは、土地の供給上の制限から必然に起るところの食物の缺乏であるやうに思はれる」と。この假

説はマルサスの時代以前に始まつてゐた、しかしマルサスは、それを生氣ある論點とし、それを公けの討論の前景に持ち出し、そして人口の増加はそれ自身で必ず望ましいものだといふ觀念を粉碎した、最初の人だつたのである。(p. 5)

こゝからして著者は、マルサス以後のマルサス説違奉者たち——J・S・ミルよりH・ライトに至る人々——がマルサス説への補強工作として持ち出した遞減收穫の概念を批判し、「この法則(收穫遞減の法則)は、世界に於ける土地の供給がほゞ固定してゐるといふ事實から起る、もしくはそれに依存してをる、と想像するのは誤まりである」こと、「本當は、いづれの(生産)要因の供給も固定してをるといふ觀念は場所的、かつ時間的に、純粹に相對的なものである。世界の土地供給がほゞ固定してをるといふ説述でさへが、一定の地質學的年紀、もしくは或る年紀の一部分についてのみ眞實であるに過ぎない」ことを指摘する(p. 6-7)。しかし結局、「この法則が農業活動に適用されるものであり、かつ實驗によつて證明された一物理法則である」ことは著者の承認するところである(p. 7)。

さて收穫遞減の法則を「一定の地質學的年紀に於ける世界の土地供給上の大凡その固定性に連結して見ると、假設的には、生存資料の増加率が人口の増加率に對比して遞減するといふ状態が起り得よう。この状態は、歴史時代に於ける若干の國々で實存したやうである。かゝる事情のもとでは、人口の増加は早かれ晩かれ停止したであらう。それ故に一つの假説(hypothesis)としては、マルサスの理論は、遞減收穫の概念の至當なる解釋によつてそれに與へられたる修正形態に於ては、その限界内で論理的に首尾一貫してゐる。」(p.10)

けれども著者によれば「近代の諸事情の解釋にそれがどの程度に役立つかといふ見地から見ると、マルサスの圖式は、一方では土地供給上の制限を不當に強調したことから苦しみ、他方では工業化と國際貿易とによつて開かれた可能性を不充分にしか重視してゐないことから苦しむ。これらの缺陷の双方はまた或る程度まで、技術上の發明や改善の重要さを過少評價する傾向の結果である。マルサスの時代には、土地供給の制限は特定の國々にとつて今日よりもより重要であつたし、また工業化と國際貿易とはなほ比較的に狹隘だつ

たのである。」(p.13)

かくて著者は、國際貿易が、そして第二には農業技術上の發明改善が、世界全體としての土地供給上の制限から出でる經濟的諸歸結を相殺するに役立つと考へる。「これら諸型の農業上の發明や改善は、生産諸要因を組合はせるオブチマム比例を變ずる。新たなオブチマムでは、舊オブチマムで必要とされたよりも少い土地が、他の諸要因と組合はせられることになる。」(p.1415)

三

第二段は「人口の壓迫」と題されてゐる。こゝで著者は、「マルサス自身は彼れの圖式を、將來に於て或ひは起るかも知れない状態を表示するものとは考へてゐなかつた。むしろマルサスは人口の壓迫を、不斷に作用する力と考へてゐた」ことを指摘するが(p.16)、しかし壓迫の概念は頗る不明だとし、再びライトやコックスを引合に出し、そして曰く、

「たとへば、人口が食物供給への壓迫によつて妨げられる、もしくは、人口が生存資料を壓迫する、といふ

敘述の精確なる意味は何であるか？

「人口増殖に對する妨げの或るものが生存資料の何かの不足から起るものでないといふことは、争ひがたき事實であり、そしてマルサスはそれを争はなかつた。

多くの疾病や大部分の天災はこの範疇に屬する。死亡率はそれ故に大なる範圍まで、食物乃至は他の物的必需品の不足とは何の關はりもなき要因によつて影響される。」(pp. 17-18)

とはいふものゝ著者はやはり、營養不良や、家族扶養手段の不充分さから人間生命が短縮され、もしくは出産制限の行はれてゐるのは、現在の事實であるといふ。しかし社會には別の集團があつて、そこでは所得は充分な榮養をとつてなほ餘りあるといふ風に、社會は經濟的狀態に於て種々異なる集團に分れてゐる。こゝに於て二つの問題が起つて來る。第一には、員數の減少又は資源の増加なしに、その社會の個々人により大なる所得を得せしめるやうな社會的變化を行ふことが可能であらうかどうか、といふ問題がある。第二には、社會組織上の變化なしに、所得の悪分配は人口の大いさとは無關係に持續してゆくだらうかどうか、そ

してこの地域が人口過少(この概念はどう定義されよう)であつてさへ、人々をして不充分なる手段の故に子供をもつことから抑止せしむるに至るであらうかどうか、といふ問題がある。これによつて見ると、所得小さきがために家族を制限するといふ特別の場合には、人口に對する妨げとは解せられるが、必ずしも過剩人口に對する妨げとは解せられないのである。」(p. 19)

「例へば、こゝに二つの社會があり、兩者は員數、人間の内在力、及び自然資源の所有の點で同一であるが、富の分配の點では第一の社會は第二の社會より一層不平等である、と想像せよ。然る場合には、第一社會に於ては第二社會に於けるよりもより多數の人々が、結婚を遅らせ、又は結婚後、彼等の家族を制限することを、餘儀なくされるであらう。双方の社會に於て、かなり多數の人口が彼等の家族を制限し、そして若干の人々の生命は營養不良によつて短縮される。しかし第一社會に於ては、これらの妨げは第二社會に於けるよりもより大きいのである。双方の社會が自然資源の點で等しい利益を有してゐるのであるから、右の

差異は物理的世界の事實に歸せしむるを得ない。それはむしろ、社會制度や社會組織に於ける差異の結果たるものである。」(pp. 20-21)

この原因は改變せしめうる。物理的世界に内在せる超えがたき困難などではない、と著者は考へる。「それ故に、いづれかの社會もしくは世界全體の狀態を考察するに當つて、現實の員數は、それに如何なる附加が行はれても生存資料へのひとしき又はより大なる附加を伴ひ得ないから、現にあるがまゝである、とは先天的にいひ得ないことになる。マルサスの圖式は、或る條件のもとで將來起るかも知れないもの、及び過去に於て若干の國々で起つたかも知れないものに關したる適正の假設ではあるが、この圖式は一切の國々に於て、もしくは或る特定の國ですでに達せられたる狀態を必然に表示することにはならない、といふ結論は免がれ得ないと思はれる。」(p. 21)

四

續いて「マルサスの社會理論」と題する第三段に移る。こゝで著者は、社會組織の改變即ち富の分配の不

平等の撤廢はやがて結婚を刺戟して再び元の不平等社會に復歸せざるを得ない、といふマルサスの見解を指摘し(p. 22)、そしてかう論ずる。「この角度から見るとマルサスの圖式は、社會機構及び組織の一理論、即ち社會は非常に不平等な所得を受けるところの社會諸階級に分割されてゐるといふ事實を説明せんとする一企圖、であるやうに見える。社會機構の大綱は、この見解では、人口の自然法則によつて決定せられるのである。」(p. 23)

しかしマルサスはこの人口原理が同時に社會の進歩に、本質的動因として役立つ一面を説いてゐた。従つて救貧法はこの刺戟をうばふものとして彈劾したのであつて、私有財産と結婚制度とはこの刺戟を保持するものとして必要と考へられた。殊に、子供を自由に制限するといふことは、右の刺戟を弱めるものとして非難された。(pp. 24-25)

かくて、マルサスの概念圖式の土臺は、人間の生物的並びに心理的素質と、物理的世界の講造とに見出さるべきである。一方には性に關する心理・生理的事實があり、他方には食物の生産を助ける自然的因素があ

つたのである。人口の自然法則は社會的諸關係を拘束し、社會的進歩の可能性を制限した。だがしかし、人間天性の或る生得的な特性のために、人口の法則は、おほよそ如何なる種類の進歩にも缺くべからざるものであつた。「マルサスの圖式に於ては、結論が理論的に前提から出て来る。もしも前提の眞實さが認められるなら、結論の妥當性は争はれ得ない。マルサスは、この點では彼れの同時代人の多くのものと異ならず、彼れの意想を散漫かつ雜然と表現した。それだから彼れの論理の堅固さは、一見して明瞭ではなく、彼れの前提と結論とが篩ひわけられ整理しなほされてからでなければ確認され得ないのである。」(p. 25—26)

こゝで著者は、マルサスが近時の學者によつて、その理論が過少人口やオプチム人口の概念を缺如してゐるといふ點、及び次いではマルサスが産兒制限を弾劾したといふ點で非難されてゐるのを辯護し (pp. 26—30)、進んで「前の第二段に於ける分析を要約かつ擴充」しながら、死亡率に影響する諸要因を分類する (pp. 36—43)。この條下には著者の積極的見解が多く現はれ、傾聽すべきものを含んでゐるが、それは省略してマル

サス批判の結論的記述を次に紹介しよう。

「これを要約すれば、——と著者はいふ——自然科学及び社會科學より護られたる近代知識の光りのもとでは、最も進歩せる近代諸國に於てさへ、死亡率及びそれと共に全人口上の變化が、つねに或る程度まで次の事實、即ち或る人々が購買力の不足もしくはその他の理由から生存資料の充分なる量を消費しない、といふ事實によつて影響されて來たことは、争ひなく明白なことである。しかしながら人口がつねに生存資料を壓迫してゐるといふ陳述は、マルサス及びその遵奉者の或る者にとつては、これよりも遙かに重大な意味をもつてゐた。彼等はこれをもつて、一方に於ける員數と他方に於ける土地及び自然資源の供給との間の關係から起るところの、人口の食物への永遠の壓迫を含蓄せしめてゐたのである。」

「マルサスによつて措定されたすべての前提がもし事實によつて充分に支持されたとするならば、右の見解は認容さるべきであらう。……近時のマルサス遵奉者たちは普通に、人間性に關する彼れの諸前提を恰かも彼れの圖式には不用であるかの如くに看過してゐる。」

けれども事實上は、人間性に關するこれら諸前提の承認は、人口がつねに食物を壓迫するといふ學說の承認にとつて必要な手初めである。但しこれに附加していふべきことは、人間性に關するマルサスの前提が拒否せられたならば、それ故に人口がいづれの社會に於ても食物を壓迫することはあり得ない、との結論は出て來ないことである。

「マルサスの人口圖式が評價される場合には、彼れの全社會理論が考慮にとり入れられねばならない。

「過去に於てもつねに存したところの、マルサスの時代に存したところの、及びまた將來——豫防的妨げが擴大されてゆく限りでは例外だが——にも存しつゞくであらうところの出來事の繼起や状態の表示として見れば、現實生活の諸事實の表示としてのマルサス圖式の當不當は、それに表現を見出したる社會理論の當不當と、不可離に結びついてゐる。もしもこの社會理論が妥當であるならば、社會的諸關係は、何の假借もゆるさざる人口の頑固たる自然法則によつて鋭化せられる。しかしながら、もしもこの社會理論の土臺を形成してをる人間性に關する假定が拒否せられるとすれ

ば、圖式は、なほ依然としてその内的論理の一貫性を保持しはするが、吾々に知られたる社會的諸關係の解決としてはその妥當性を失ふて、たゞ、この地上に棲む者とは違つた生物の棲む世界にのみ適用しうるものとなる。」(pp. 43-45)

五

簡単に所感を附記して置かう。

まづ第一段の論述についていふと、そこでは著者は、マルサスのいふ「究極の妨げ」(ultimate check)即ち「食物の不足」を専ら問題にしてゐる。土地供給の制限をマルサス理論の根柢に見るのもその爲めである。そしてかういふ風にマルサス理論の構造を純粹自然主義的に解し、従つてあくまでも一般的抽象的な人口對生存資料の問題として見る限り、「マルサス理論」はなるほど「マルサス以前にあつた」こととなり、へばウオレースなどの所論と相別つところが無くなつてしまふであらう。しかし「究極の妨げ」「食物の不足」は飢饉の如き場合しか起らぬ、現實の場合では問題にならぬ、とマルサスはいふてゐるのではないか？

現實の問題としてマルサスは「土地供給上の制限を不當に強調した」わけではなく、彼れはむしろ、一國民が現實に支配しうる食物範圍は土地そのもの、技術的生産力によつて規定せられるものと異なる點を「強調」してゐる。それは一面、土地私有といふ社會制度を通じて土地の技術的生産力によつて規定せられるものよりも狹隘となるが、他面に於ては「國際貿易」がその範圍を擴大するとマルサスは論じてゐるのである。一言にしてマルサスに於ける人口を「制限」「規制」するものは、自然的範疇に於て解されるを得ないのである。

かういふ意味で著者ペンローズ氏のマルサス解釋は、なほ在來諸學者のそれと本質的に異なるのではなく、むしろマルサス理論から社會的諸要素を殆んど全く抹殺し去る形となつてゐる點では、若干の後退を示すが如き感をいだかざるを得ない。

第二段の論述は、それ自身としては至當であるが、すでに「マルサスの理論」そのものが右の如く自然主義的特性に於て理解されてゐるのであるから、それに向つての批判は焦點を外したもとならざるを得ない。

い。「社會制度や社會組織に於ける差異」をマルサスの理論は無視してゐるのではなかつた。尤も著者はこの點を第三段に於て取扱ふてはゐる。けれどもそこでは、人口の増殖傾向が何故に不平等社會を不可避ならしめるかといふマルサスの見解が専ら顧慮せられてゐるのであつて、著者のいふ「マルサスの概念圖式」そのものは依然として自然主義的に理解されてゐるのである。

私見によれば、マルサスの人口理論は増殖原理と規制原理との二つから成り立つものであり、しかもこの二つの原理に表示せらるゝ「人口」と「生存資料」とは現實の社會諸關係より全く抽象せられたるものではなかつた。眼前の資本制社會に於ては「人口」は一定の階級にある者の員數——主として労働者人口——であり、それを「制限」「規制」する「生存資料」は勞賃を介して支配せられる物の分量——いはゆる實質賃銀——であつた。マルサス理論の科學的特性はかういふ觀點から初めて正當に理解され得るであらう（拙著、人口理論と人口問題、千倉書房刊、第六章參照）。むしろんかういふ要求を本書の著者にまでもとめることは

無理であるが、本書を一貫して著者が高揚しようとする「物理的事實」以外の諸要素、特に工業や國際貿易の發展の可能性といふが如き要素がすでに詳しくマルサスの論著の中に説かれてゐることを想ふものは、少くともこの點が仔細に吟味されてゐないのに不滿を感じるであらう。

おしなべて本書の理論的部分は明快を缺き、積極的に寄與するところも多くはない。本書の重點はむしろ第二部以下の「應用」的論述の部分にある。そしてこの部分は人口問題研究家に多くの便益と省察の機會とを與へるであらう。(昭一〇・九・二九)

古屋美貞註譯『デード・リスト の經濟思想史上卷』

手塚壽郎

西洋諸國に於ても、我國に於ても、經濟學史は、大學の經濟學教育の教科目中の重要な一つとして、十九世紀末から取り入れられてゐる。時間的關係から見ると、だから經濟學史は、經濟學の比較的に興なる領域であると云つてよい。

新興の科學又は科學の領域には、我々が想像し得る以上に、研究者が集つて來るものである。既に一定の體系が打ち建てられてゐるやうな完成せる科學に、一新生面を開くが如きは、大言壯語の中に口走ることが容易であつても、事實容易のことではない。そこで勞せずして功を成さうとする研究者は、とかく新興科學を目指して行く。經濟學史も經濟學中のかやうな領域であらう。經濟學史上の夫々の學者なり學說なりを取